

随筆

金子翁

森本準一

(落葉集・遺稿)

六甲祥龍寺境内に元鈴木商店大番頭故金子直吉、故柳田富士松両翁の記念碑が建った。去る昭和二十四年二月二十六日除幕式。鈴木商店の盛時に当っては五十有余の会社の実権を握り、その対外貿易額は三井物産と制覇を争ったほどで、わが神戸市の繁栄に寄与したことは、はなはだ大きなものであった。それは従業員一同の活躍によることはいままでもないが、店の重鎮金子、柳田両巨頭の画策にもとづいたものである。

かつて大蔵省の某高官が私に話されたことであるが「自分にはわが国の財界に最も尊敬する三人の偉人がある。日銀の井上準之助、台銀の山成喬六、そうして鈴木の子直吉、三人がそれである。この三人は平凡な事柄の報告を受けるときには聞くがごとく聞かざるがごとく態度をして、すこぶる頼りないような気もするが、一たん難問題を持ち出して解決困難な旨を告げると、急に元氣を出し、よし、しからば自分で解決しよう」という意気込みが見え非常に頼もしく思われる。世間にはとかく難問題に出会うと当惑した顔つきをする人が多いが、以上三人にかぎってその点は見あげたものだといふのであった。なるほど金子翁の氣宇宏大、思慮綿密、先見の明とともに、その実行力が今さらのごとく思い浮ばれることである。

その一生を通じて人の意表に出る言行も少くなかったが、第一次欧州大戦中日米の間に船鉄交換の交渉があったとき、その契約調印の際に当り相手方の契約者が米国政府だけでは信用がけないから、民間から保証人を立ててもらいたいということ

を、当時のモリス米國大使に申し出で、ついに本國政府の許可を得てナショナル・シチーバンクに保証をしてもらったというような有名な話もある。政府との契約書に対し、民間のものを保証人に立てたなど、恐らく世界史上に類例のないことであろう。

その晩年、某氏から「鈴木商店は没落したが、その事業はとごとく異彩を放っている。金子君ももって往生すべきであろう」と話されたので、その言葉をそのまま率直に取次いで翁の感想を聞いたところ、暫く沈黙していられたが、おもむろに口を開いて「世に功罪相半ばするということがある。明治、大正の産業革命は第一に運輸交通の高速度化、第二に硫酸肥料の普及、第三に人絹時代の出現——この三つに要約することができ、交通運輸のスピード化はジーゼルエンジンの發達から起り、硫酸肥料の普及は空中窒素の採取から起り、人絹の普及はヴィスコースの發明から起った。しかもこの三者のいづれもわが国では鈴木商店によって第一手が着けられ、スイスからのズルツァー特許買収は神戸製鋼所に、フランスからのクロードの特許買収は彦島第一窒素会社（今の東洋高压の前身）に、わが久村君研究の成果は帝國人絹にそれぞれ実施している。換言すれば明治、大正の産業革命の源は鈴木商店にあるといつても過言でない。これがため國家に多少の貢献はしているが、一面また多くの倒産者、失業者を出したことも事実であつて申し訳ないことである。功罪相半ばするや否やは後世史家の判断に待つよりほかありません」と述べられた。

以上は金子翁の抱負の一端を叙したにすぎないが、ほぼその人となりやうかがうことができると思う。国歩多難に遭遇して偉人の出現を待望すること今日より切なるはない。

偉人出でよ、新人出でよ！ (昭和二十四年ころ神戸新聞掲載)

「へそ曲り」の弁

小倉敬二先生の

「あひるの火事見舞」から

へそまがり列伝中のシモン・ペテロ中野好夫氏が「随筆」近刊号にへそまがりの弁というのを書いている。いわく、「わたしをへそ曲りと呼ぶなんてとんでもない。わたしのへそは十五夜の月のごとくまん円くて、腹中の正中線上に鎮座しましたし、出しやばるでもなく、引込み思案に過ぎるでもなく、形容まことに端麗優美、われながら惚れられするくらいである」と言っているところからみると、顔はともかくとして、へそにはよほど自信があるらしい。言うまでもなく、へそは美しいに越したことはない。イギリスのジェームス二世の王女マリアのように、ふたつあつても困るし、無くて困る。旧約聖書ソロモンの雅歌にあるシユナミの処女のへそは「シャロンの野の白百合もて囲まれたる黄金の盃のごとく、こんこんとして常にうま酒のつくることなし」とあるから、よほど美しかったにちがいない。英文学者中野好夫君も、それやこれやを思いあわせて、この一文を草したのである。

彼のへそが曲っているかいないかは、見たことがないから何ともいえぬが、かれにはいささかへそ曲りのところがないでもない。大学教授をやめるとき、月三万五千円あれば食えるじやないかといわれたのに対し、「何をいやがる、食い方によるんだ」とケツをまくって大学をオン出たこともあり、そのいい草からみてもへそ曲りの性格顕著なものがあるかもしれない。街角で立小便して巡査にとがめられ「大学教授ともあろうお方

が何たることか」とたしなめられるや、「ちよつと待って下さい。大学教授が立小便したとみるからオカしいのです。一個自然の人間動物中野ソレガシが、自然の生理に随つて行動したのだとみれば、別に不思議はないじゃありませんか」とヘリクツをコネたところなど、いささかへそ曲りである。

最近筆者の手許へ「生田神社略誌」というのが贈られてきた。その中に「へそ団子」の由来について書いてあるのを見て面白いと思つた。生田神社では毎年の例祭には、鏡モチのかわりに、へそ団子を神前にお供へすることになっているんだそうである。音に聞く生田神社は健康長寿の神さま。へそは人体の中央にあつて、その形が正しいか正しくないかは、健康長寿に大きな関係がある。「当社は神戸市全体の総氏神にましまし、氏子に出生児あれば必ず当社に初詣をするを例とし、もし參詣を怠るときは、その子のへそが曲つて成育しないと云い伝えられる。よつて今に初詣するものが絶えないのです」とある。なかなか巧いPRだ。

へそ曲り、つむじ曲り、天の邪鬼。このごろのように世渡り上手が多くなつて、世上滔々として安きに流れつつあるとき、へそ曲りの抵抗分子が二人や三人あつていいんじゃないか。

(大朝客員)



豊年印の古い看板

岡本貞春氏から贈らる

(淡路朝来郡岩屋三の四)